

その場で編まれてゆく危険な吊り橋

管啓次郎

詩を書くのは個人的な、孤独な作業だと大部分の人に思われていて、それはそう。人間が生物学的個体として生きてゆくかぎり、いまアートと呼ばれるもの(芸術や技芸)からひとりぼっちの時間がなくなることはないだろう。でも詩はことばを使い、ことばで組み立てる、ことばで痕跡を残す。ことばという素材はあらかじめ共有され誰にでも平等に開かれていて、人はいちいち承認を得ることもなく勝手にその素材に参加し、勝手に無料で借り出し、勝手にそれを使う。

ぼくが「くだもの」といえばそれは八百屋のおかみさんが「くだもの」を呼ぶときに使うのとおなじ単語であり、それを発する声やアクセントがたとえ個別のものであっても紙に転写すればおなじ「果物」だ。するとわれわれが発するひとつひとつの単語が誰もが出入りすることのできる扉のようにも思えてきて、その扉のむこうにどんなに混乱した風景や何も見えない深淵がひろがっていようが見た目はあくまでもおとなしく、文という文は扉がいくつもつらなる、ぼっかりと明るく開けた野原の迷宮のようなものになるだろう。たとえば「風が吹く海岸の夏の夜、猫が月にむかって吠えていた」という文があるとき、人が思い浮かべる「風」「海岸」「夏」「夜」「猫」「月」「吠える」といった語のそれぞれはじつは内容が異なっていて、異なりつつそれぞれが扉となって別の時空にも別の誰かの想像力にもわれわれを誘ってくれる。ひとつひとつの語が扉であり、穴。こうしてわれわれは穴だらけのセンテンスを介してつねにあらゆる他人とつながっていて、それは逃れようがない。何をどう語っても書いても、単語ごとにわれわれは自由に入れ替わっているのだ。入れ替わることを強いられている、ことばという共有物によって。われわれの「われわれ」は、ことばにおいてその程度にぼんやりとしたものだと思う。

去年の秋、10月15日、ミシェル・フーコーの誕生日、ぼくらは円卓のまわりに集まった5人の詩人だった。白い円卓には四川料理も広東料理もなくて、それは円盤形の空白だった。円卓のまわりにはレールが環状に敷かれ、ぼくらを撮影するカメラがぐるぐるとおもちゃの鉄道のようにまわっていた。人間の体におけるもっとも完璧な円が眼球の虹彩と瞳孔ならば、そのときその閉ざされた空間に一体いくつの円があったかわからない。数台のカメラのレンズも、もちろん円。大きな窓のある建物で、窓の外はありふれたオフィス街の大通りの風景だ。だがぼくらは「詩人」という属性の定義上、そこでどんな想像をめぐらすことも、どんなことばを書きつけることも、どれほど遠くまで行くことも、許されていた。

なんとなく円卓を囲んで着席しても、その時点で何をどう進めるかはまるで決まっていない。第一、ぼくは三角みづ紀以外の3人を知らなくて、その日初めて会ったのだ。三角みづ紀は柏木麻里に会ったことがなくて、やはりその日が初対面。斉藤倫と橘上にしても互いに特に親しいわけではな

かっただろう。5人が集まったといっても、そんなわけで、5人の全体をイメージできる人は誰もいなかった。5人をむすびつけるのは、ある程度まで共有された日本語だけだった。だがさきほど述べたようなことばの扉的特性のせいで、「月」といっても「猫」といっても、その扉を介してぼくらはあらかじめ自由自在につながっているのだった。それは避けられないことで、着席しじっとすわっているだけで、ぼくらはまだ発せられないことばによってぐるぐると循環的存在になっているのだった。

田中功起が黙って1枚の紙を円卓に置いて、ゲームが始まった。紙には「ひとつの出来事を誰かと共有することについて」とのみ記されていた。ぼくらにわかっていたのは「5人で詩を書く、どう進めるかはその場で話し合っ決めて、主題は田中功起がその場で与える」ということだけ。その紙をいざ渡されて、ぼくは爆笑したか溜め息をついたかのどちらかだが、覚えていない。さて、どうする。ちょっとだけ沈黙して、誰からともなくその紙に対する反応を話しはじめたのだと思う。出来事？ それはいま。こうしてここにやってきて円卓についた。これが出来事。あ、もう共有しちゃった。今後の数時間何をやっても、すべてが共有されてゆく。それはあまりに気楽な話だが、それがことばの圧倒的・全面的な共有力のせいならば、逃れようがない。おまけに円卓は、なごやかな相互監視を強いる。この近さでは、すべての動作や息づかいや鼓動が共有されるだろう。秘密の考えだって。さあ、どう手をつけようか。まず、出来事の共有とかそういうことについて、みんなが連想することを勝手に紙に書いてみることにした。

ことばの書き方はいろいろあるときみは思うだろうが、じつはそんなにないのだ。

- 1) 何も書かない。
- 2) 断片だけを書く。単語やフレーズを、生け花みたいに並べたもの。
- 3) はっきりした構造のあるセンテンスを書く。

後のふたつが、それぞれ「詩」「散文」に似たものとして受けとめられるのは、わかるだろう。ぼくは思うのだが、人は単語を完全に孤立させて思い浮かべることができないので(頭にそれを思い浮かべただけでその周囲にはすでに惑星のように別の単語が沈黙のうちに舞っている)、はっきりした意味伝達の回路としての「散文」にもゆきつかない、イメージのダンスパーティーみたいな「詩」のあり方は、むしろ人間のことばのもっとも日常的な状態なのではないだろうか。そのとき5人がそれぞれに記したことばのスタイルも内容もまるで違ったが、「空白」「断片」「詩」「散文」のあいだをそれぞれにさまよっていたことは確実だ。それからこの紙を回覧し、それぞれが記したことばのあまりの違いに驚き、さあ、どうしようか。全員が他の参加者の書いた紙に自由に行を書き加え、あるいは削除した。だんだん頭が熱をおびてくるのがわかる。けれどもそれが1巡しても次の1歩が踏み出せず、さらに迷いの時間がつづいた。

詩の共同制作には、やり方はひとつしかない。これもことばの性質上、ひとつのことばは他のことばを排除するか、少なくとも、表面化させない。ある空間を占めることができることばは、ある時点において、ひとつだけ。だからもっとも単純に考えてみるなら、リレー競走のように5人が順番にことば

を継いで書いてゆくのがすっきりしている。三角とぼくは 2011 年秋に「しずおか連詩の会」に一緒に参加していた。そこでは5人の詩人が3行、5行の交替により、合計 240 行の長詩を完成させた。きょうも5人。だったらとりあえず、1行ずつ書いてつなげてみようか。

ただちにはじめた。円卓での並びの順番に、橘上、斉藤倫、三角みづ紀、管啓次郎、柏木麻里で1巡。ついで2巡目にはひとり飛ばしで橘→三角→柏木→斉藤→管。3巡目にはふたり飛ばしで橘→管→斉藤→柏木→三角。4巡目には3人飛ばしで橘→柏木→管→三角→斉藤(3人飛ばしはちょうど逆回りになるのもおもしろい)。そして5巡目にはまたももとの順番に戻って、しめくり。この手順は進行しながら決めていった規則だが、それなりにつながりに妙なダイナミズムが出てきて、よかったと思う。こうして書かれたのが、次の詩だ。

水を飲んだ、別に水だから飲んだってわけじゃないけど  
なんてちょっといいすぎたかもしれないな  
わたしたちは円になっているだけで  
惑星同士のような引力にとらわれてしまう  
砂と水を見分ける。  
砂がわたしにそう言ったわけじゃないけど  
あきらかなる感覚です。  
たとえば、窓のむこうだよ  
けんけんばであんなとこまでいけるんだ  
四谷四丁目東と月面が近接する  
1987年12月19日にやったけんけんばと月面が近接する  
月に氷はないのになぜあんなに輝くの  
垂直な月光が私を立たせる  
そのあしのうらにかくれていた半分のもの  
残欠と残欠が教えてくれる瞬間  
月光という出来事  
引かれあうのではない引力をさがして円になる動物  
獣としての私は水を飲み砂に眠る  
この夜。  
獣にだって影はあるよ。夜にだって影は出る  
夜の水と影の光に裏切られては  
四谷四丁目東と月面が近接する  
この夜。

砂漠を流れる水と中庭の噴水から噴き出す砂  
水に許される日まで水を飲み続けよう。

こうした作業にとりかかると時の流れは関係なくなるので、はたしてここまでどれだけの時間がかかったのかは記録映像を見直さなくてはわからない。主観的にはあつというまだった。詩の本質は凝縮力にあるとぼくは思う。つまり、元来ばらばらでどんなふうにも並びうることばが、あるとき互いのあいだに引力を見出し、流れをもち、流れの痕跡を刻んでゆくということだ。そう思うと、円卓に集うわれわれのあいだで橘上が「水を飲んだ」というひとことで最初の一行をはじめたときに生まれた「水」「円」「引力」といったモチーフ、その裏打ちをなす「砂」(水と対立する乾き)と「けんけんば」(重力に対する反抗の動き)がこんな風にかたちを得てゆくそのプロセスにおいて、われわれはたしかに何かの出来事を共有し、その出来事の痕跡がこうして文字列になったのだった。

これで一区切り。だが、どうにもひっかかるのは、最初にそれぞれが書いた連想メモだった。あれをそのまま捨てるわけにはいかないよね。もういちど見直すことにした。見直して、気になる、あるいは気に入った、行を選んで書き出してみようよ。5人それぞれのメモから、1行ずつ。ぼくが選んでノートに控えておいた行は(どれが誰のことばかももうわからなくなったが)以下のとおりだ(なぜだろう、全6行)。

死者もできごとのない一日を生きることはない。  
その1点だけを見ていない人々の戻らない時間  
いつかは変化するかもしれないのを待っている  
ほっとしてくれよ、もういなくなった。もはや過去  
十年前の秋について考える(スライダーの練習をしながら)  
シンバルを黄色のスーツケースに入れて低音を出した

ことばはつねにすでに存在していて、人にとってことばのすべては借り物なのだから、誰が書いたことばであれそれを読み、選ぶことは、すでに書くことと変わらない。この6行の並びにはまだ「詩」と呼べるだけの凝集力が生じていないけれど、その萌芽はあるように思う。それは他のみんながそれぞれに選んだ行の並びにおいてもおなじ。探せばキノコが見つかる森、鳥の卵が見つかる原野の状態だ。

出来事はむこうからやってくる。たとえきっかけの与えられた出来事でも、それは突然起こる。出来事の中で予想はくつがえされ、予期された方向からどんどん逸れてゆく。道はその場で発見される。ぼくらのことばの道はいつのまにか危険な木の蔓で編んだ吊り橋になり、風に激しくゆれ、気が遠くなるほど下方に溪流が見えている。しかも橋はわたるにつれてできてゆくような橋で、向こう岸

は霧につつまれ、砂漠の予感と未知の光が立ちこめている。この吊り橋が出来事で、進行する出来事自体に駆り立てられるようにして、ぼくらは道を急いだ。そしてこの5人からしか生まれなかったことばの群れを2枚の大きな紙に書きつけて、夜がはじまるとともに全員が姿を消したのだ。